

はげましのことば

皆さん お久しぶりです。今年3月まで学長を務めていました中村です。1年前、画面の向こうにいる皆さんの姿を想定しながら、Videoで入学式のご挨拶を行いました。早いものであれから1年。既に桜前線が広島県を過ぎた今、季節は確実に春から初夏への装いを示しています。しかし残念ながら、芳しいその春の香りを、マスクを通して感ずる生活を私達はまだ強いられています。そうした中で、安全・安心という配慮から完全な対面式ではありませんが、同級である仲間と同じ空気の中で、県立広島大学へ入学したという実感を再びしっかり培ってほしいという教職員の皆さんに対する想いが、今このような形で入学式再現がなされていること、大変嬉しく思っています。

さて、コロナ禍の中にあって皆さん、どのような学びを行ってきましたか。私も大学基礎セミナーⅠの1コマを担当させて頂きました。その中で、本学教育の基本目標は「課題探究型地域創生人材の育成」であることを紹介しました。この目標の具現化こそが、これからの大きな社会の変革にあっても、また予想できない未来社会においても、地域社会を牽引する皆さんの揺るぎない力になると私達は信じているからです。ところでその授業の中で私は、「走れメロス」のお話をしたことを覚えていますでしょうか。理数教育研究所が開催した「算数・数学の自由研究」において作品コンクールに入賞した中学生村田少年の発表内容を紹介しました。太宰治の小説「走れメロス」の小説を詳細に読み取り、舞台となった夏のギリシャの日照時間やメロスの往復した村との距離、幾つかの合理的な仮定を設定して検証した結果、結論としてメロスは往路は歩いていた。さらには災難にあいながら、死力を振りしぼって走ったとされる復路後半の頑張りも「単なる早歩き程度だった」というのが彼の発表内容でした。

ここで強調したいことは、課題探究型地域創生人材のコアになる原点は、疑問を抱くことにあるということです。村田少年も「本当に走っていたのかな」という素朴な疑問から出発し、次に彼の主体的な探究と考察が展開されたわけです。コロナ禍にあっては、例えば、過去の歴史においてウイルスや細菌などの感染拡大に人々はどのような対応を示したのか、そして現在の人たちとの状況比較、さらにはPCR検査の原理は、あるいはコロナのようなRNA型ウイルスは何故変異しやすいのか、さらにまた、コロナ禍における消費者物価指数の変動要

因は何かなど、様々な分野からふんだんな疑問がうまれるはずですが。いやむしろ、コロナ禍にある非日常的な状態だからこそ、多くの疑問やじっくりと読書による探究やオンラインで主体的に検索、思考する時間と姿勢が培われるのではないのでしょうか。

本学は、主体的な学修姿勢を養う教育への取組では、文部科学省から9つの先端的高等教育機関に選ばれ、昨年度、6年間の取り組み成果としては最高級のSランクの評価を得ています。したがって皆さんにしっかりと、学びへの主体的な姿勢を養うことにおいては絶大な自信があります。そして今皆さんに求められているのは、主体的な学びを誘う、多くの疑問を絶えず抱く姿勢です。疑問は、主体的に解決する力を伴って「課題探究」へと深化できるでしょう。 コロナ禍にある現在こそ、多くの疑問を抱くチャンスがあると考え、絶えず思考する自分を鍛えて欲しいと願っています。

最後に、建築家ガウディが設計した教会の建設などに参加した彫刻家・外尾悦郎さんの素晴らしい言葉で私の皆さんに対するメッセージを閉じたいと思います。

「人は答えを得た時に成長するのではなく、疑問を持つことができた時に成長する」

県立広島大学における皆さんの成長を、心から期待しています。頑張ってください。

令和3年4月5日

県立広島大学前学長 中村 健一